

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論 文 題 目
Dissertation title

中国語を母語とする日本語学習者における接続詞の誤用に関する研究
—「添加型」を中心に—

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and Cooperation,
Hiroshima University
博士課程後期 教育文化専攻
Doctoral Program Division of Educational Development and
Cultural and Regional Studies
学生番号 D163012
Student ID No.
氏 名 唐 彬 □
Name Seal

本論文は、「YUKタグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス」Ver.8（以下、「YUKコーパス」）を資料に、中国語を母語とする日本語学習者（以下、「学習者」）が日本語を習得する過程で産出する接続詞の誤用実態を解明したものである。接続詞の中で学習者が最も誤用しやすい「添加型」に焦点をあて、そこにどのような誤用パターンがあるのか、その誤用が生じる要因が何であるのか、また、学習者にとって学習しにくい「添加型」は何であるのかといった三つの課題に沿って、母語（中国語）話者の視点から誤用が生じる規則性を解明している。

第一章は序論であり、本研究の目的、意義、研究資料、研究方法などを述べている。

第二章は、接続詞に関する先行研究を整理している。まず接続詞とは何かについて、先行研究で示されている接続詞の定義にもとづき、本研究の接続詞の定義付けを行っている。次に、接続詞の分類に関する先行研究を整理したうえで、本研究で使用する接続詞の分類基準を明確にしている。さらに、本研究で論じる「添加型」に関する先行研究を整理したうえで、先行研究で明らかにされていない課題を指摘している。

第三章は、「YUKコーパス」から抽出された誤用例を用いて、学習者が最も誤用しやすい接続詞が「添加型」であることと、そこに不使用、過剰使用、混用といった三つの誤用類型があることを論じている。

第四章は、「添加型」における不使用の誤用例の分析を行い、「そして」と「また」をめぐる不使用の規則性について考察している。その結果として、第一に、文章が句点で分割される場合、文と文の間に「そして」と「また」が使用されにくいといった傾向にあることが明らかにされている。「添加型」の不使用が句点の場合に頻出する要因としては、学習者の母語である中国語の影響が考えられる。中国語では文頭より文中に接続詞が多く使用され、句点は関連ある文章の終わりを意味する。学習者は、句点が一つの文章の終わりを表し、句点の後ろの文は前の文とは異なる論理関係として位置づけできる文であると認識してしまう。そのため、学習者は接続詞の不使用を生じさせているのである。第二に、句点に続く後文に「も」が現れると「また」が使用されない傾向にあることが明らかにされている。この要因としては、「も」と対応する中国語の副詞“也”で前後文の添加関係を表現することができるという中国語の文法規則をそのまま日本語に適用し、それが誤用を引き起こす引き金になったと考えられる。第三に、「そして」の不使用の前後文には時系列関係があることが明らかにされている。これは日本語と中国語における文章構成が異なることが要因となっている。

第五章は、「添加型」における過剰使用の誤用例の分析を行い、「そして」「また」「それから」「それに」をめぐる過剰使用の規則性について考察している。その結果として、第一に、二つの文が読点によって繋がれる場合、学習者は前後文の間に「そして」「また」「それに」を過剰に用いる傾向にあることが明らかにされている。不使用の場合と同様、過剰使用が読点の場合に頻出するのは、学習者の母語である中国語の接続詞の出現位置と文脈の展開が影響している。第二に、文中では、読点の前に使用される語句の品詞によって過剰に使用される「添加型」が異なることも明らかにされている。それは、読点の前に動詞が用いられると「そして」と「それに」が過剰に使用され、他方、読点の前に動詞以外のものが用いられると「また」が過剰に使用されるというものである。この要因としては、学習者が日本語における「て」や「し」などのような動詞の文中の接続表現を十分に理解しておらず、学習者独自の規則を作っていることが考えられる。その規則の一つ目は、「～して…する」のような動詞の文中接続であれば、「～して…する」と「そして」の形式上の類似性から学習者が「そして」を過剰に使用してしまうというものである。二つ目は、文中接続が使用される場合であっても後文に「も」などがある場合、中国語の連語の句型「而且…也」の影響から、学習者は「それに」を使用するというものである。三つ目は、読点の前に動詞以外が使用される場合、後文で情報追加を示すため「また」が使用されるというものである。第三に、「そして」「それに」「また」と異なり、句点によって文章が接続されると、文と文の間に「それから」が過剰に使用される傾向が明らかにされている。「それから」の過剰使用で句点が多く観察されるのは、「それから」のもつ区切り性が反映されているからと考えられる。第四に、「そして」の過剰使用の前後文には非時系列関係があることが明らかにされている。これは日本語と中国語における文章構成が異なるためである。

第六章は、「添加型」における混用の誤用例を分析し、「*そして→Y」と「*それから→Y」「*それに→Y」をめぐる混用の規則性について考察している。その結果、第一に、「*そして」「*それから」「*それに」の三つの接続詞は他の添加型の接続詞と最も多く混用され、とりわけ「また」との混用が顕著であることが明らかにされている。「*そして」「*それから」「*それに」が「また」と混用されやすいのは、「また」を含む四つの接続詞の文体差に関する知識が学習者に不足しているからである。「*そして」と「また」との混用の要因は、「そして」の使用しやすさから両者の意味上の差異を理解せず多用し、さらに区切り性を感じさせる接続詞として「そして」を学習者が捉えているためである。「*それから、*それに」と「また」との混用の要因は、学習者がより文章的な言葉として「それから」「それに」を捉えているためである。第二に、「*また→そして・それから・それに」は、前文が後文のきっかけになるといった前後文関係をもつという共通点が明らかにされている。第三に、「そして」と「それから」の混用には、日本語母語話者と異なり学習者には、前後文に区切り性があると「そして」、連続性があると「それから」を使用する傾向が明らかにされている。「*そして→それから」の場合、学習者は文法知識の不足のため、多様な意味を含む「そして」と「然后」を混同し、その使用しやすさから前後文を接続するためだけに「そして」を使用している。「*それから→そして」の場合、学習者が語形の類似性で時間的關係と因果關係という機能を合わせもつ接続詞として「それから」を誤って使用している。「そして」と「それに」の混用に関しては、「*それに→そして」の誤用例のみが出現している。時間的流れに沿って出来事を述べる時、学習者はその出来事が上に重なるというイメージとして捉える傾向が明らかにされている。学習者は「それに」が「上に重なる」という意味を理解しているものの、文が表す出来事を正しく捉えていないことが誤用の要因になっている。

第七章は結論であり、第四章から第六章の分析を踏まえて、「添加型」の誤用の規則性を整理し、次の三点を示している。第一の誤用の規則性は、文章の形式上の特徴によって規則的な「添加型」の不使用と過剰使用が生じるという誤用の様相である。第二の誤用の規則性は、日本語と中国語の文章構成の違いによって「添加型」の不使用と過剰使用が生じるという誤用の様相である。第三の誤用の規則性は、一つの論理関係の中で、学習者は独自の誤用規則を適用することによって「添加型」の混用が生じるという誤用の様相である。そして、さらに今後の課題として、「添加型」以外の誤用につ

いて研究する必要性などを述べている。

本論文は、「YUKコーパス」を資料に、「添加型」に関する誤用の規則性について、接続詞の意味分析に加え形式上の特徴なども視野に入れ、多様な角度から考察を行った。その結果、中国語母語話者が第二言語として日本語の「添加型」を学習する場合、接続詞に関する知識の欠如とともに母語である中国語の影響を受けて学習者が独自に創りあげた接続詞の規則に従い、接続詞を使用しなかったり、過剰に使用したり、他の接続詞と混用したりする現象が生じているということを明らかにした。

備考 論文の要旨はA4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.